富山市八尾の民俗芸能「おわら」の伝統と観光化

竹内　潔（富山大学人文学部）

1.　「伝統」と「観光」

どの文化、どの地域にも、当該の文化や地域で生活する人々が「伝統」として認識している慣習や物語（ストーリー）が存在している。このような「伝統」的事象は、当該地域の人々によって、連綿と世代を経て伝えられてきた不変の事象だと捉えられているが、近年の歴史学や文化人類学は、古来の歴史的「伝統」と把握されている事象が、実際は比較的に新しい時期に登場したものであったり、あるいは意図的に創出されたものであったりすることを明らかにしてきた（ホブズボウム＆レンジャー、1992 など）。

つまり、「伝統」として捉えられている文化的事象は、当該地域内外の文化、社会、政治、経済などの様々な要因と絡み合って、時代を追って更新されていくダイナミックな事象なのである。そして、新たに生まれた文化的事象を固定的な「伝統」として、当該の地域に生きる人々が認知する際には、その事象を自分たちの文化の「本質」と感得させる要素がその事象に含まれていることやその事象に対する人々の主体的な関わりが必要とされる。

また、20 世紀に誕生した「観光」は、現在では、大規模な人間の移動と新たな文化を創出する契機となっている。観光現象によって産み出される文化は「観光文化」と呼ばれるが、「観光文化」は、「観光者の文化的文脈と地元民の文化的文脈とが出会うところで、各々独自の領域を形成しているものが、本来の文脈から離れて、一時的な観光の楽しみのために、ほんの少しだけ、売買されるもの」である（橋本、1999）。つまり、地域住民が観光業者や行政と「折り合い」を付けながら、地域文化の一部について、観光客の求めるイメージを分かりやすく表象するよう加工して創り出す文化である。

この小論では、富山市八尾地域の民俗芸能「おわら」を取り上げて、地域外からのインパクトと地域の文化の相互作用によって新たな「伝統」が創造されたことについて記述し、そのような「伝統」が、近年の著しい観光化状況との関わりにおいて、地域住民の主体的関与のもとで地域のさらに新しい「伝統」として展開していく可能性について考察を試みたい。

2. 八尾の概要

2.1 地理と地形

この報告で取り上げる富山市八尾地域は、富山県の中南部に位置し、面積 236.86 平方キロメートルで、東西 12.2 キロ、南北 28.68 キロの菱形状をしている（図 1)。地形的には、岐阜県から続く山地と富山平野の南端の平野で構成される。岐阜県との県境には、1638 メートルの金剛堂山を主峰として白木峰などの飛騨山脈の支脈が連なっており（図 2)、山地に源を発する川は北流して流域の山腹に段丘平野を形成し、地区の中央部で合流して、井田川となっている。2002 年(平成 14 年)の時点で、総面積の 85 パーセントが山林と原野であり、10 パーセントが農地で、宅地は 2 パーセントである（富山県八尾町、2003)。

図 1. 八尾の位置（ただし、富山市と合併前の地図）

図 2. 八尾の地形
（Yahoo 地図をもとに作成）

地形的には、八尾地域は、大きく分けて、山間地、河岸段丘、平野部の 3 つに区分することができるが（図 2)、このような地形に対応して、居住地域も、江戸時代中期の開町以来の歴史を持ち商業地域である河岸段丘上の「旧町」、山間地農村地区、平野部の新興住宅地域の 3 つに分けることができる。

この報告では、「おわら風の盆」がおこなわれる「旧町」を中心に記述を進めていく。

2.2. 歴史

八尾の歴史について、『八尾町史』(1967、八尾町史編纂委員会)、『続八尾町史』(1973、続八尾町史編纂委員会)、 八尾町商工観光名鑑 (1980、八尾町商工会) などに拠りながら、概略を紹介しておきたい。

八尾の名の由来にはいろいろな説があるが、有力なのは、「八」が数の多いことを表し、「尾」が山の尾根を意味して、多くの山があるという地形に由来するという説である。

奈良時代の歌人大伴家持の「奥山の八峰(やつお)の椿つばらかに今日は暮らさね大夫(ますらを)の伴(とも)」という和歌は八尾を訪れて詠んだ歌とされているが、八尾の町が歴史上に登場するのは、16 世紀に浄土真宗の聞名寺(もんみょうじ)が飛騨国吉田村(現岐阜県飛騨市神岡)から八尾の地に移り、真言宗の蓮勝院(れんしょういん)(現在の旧町・下新町の八幡社)も造られて、門前町が形成されたことが契機である。江戸時代に入って、1636 年(寛永 13 年)に、加賀藩三代藩主の前田利常から当時の名主に、町を造って商業活動を認める「町建て」の御墨付が授けられ、現在の八尾旧町の原型が成立するに至った。その後、町は、五箇山や飛騨山地と富山平野を結ぶ交通の要衝として、和紙に繭の卵を産み付けた「蚕種(かいこだね)」、和紙、炭、薬草、柿、芋、栗、蓑(みの)、蠟(ろう)、漆(うるし)などの交易集散地として発展し、1692 年(元禄 4 年)には戸数 385 戸、人口 1841 名を数える大きな町となった。明治に至るまで、八尾は加賀藩から分かれた富山藩の財政を支える「御納所(ごなんどころ)」であり、土地の産高の十割を納めることが可能なほど裕福な「十免(じゅうめん)の地」と呼ばれていた。

とりわけ、蚕種の交易と和紙づくりが盛んにおこなわれ、1813 年(文化 10 年)頃には、八尾が販売する蚕種が全国の蚕種の四分の一を占めるようになった。また、元禄時代から富山の配置薬業が盛んになるとともに、薬の袋紙の需要が増えて和紙産業が活発におこなわれるようになった。1788 年(天明 8 年)には八尾の町に紙問屋が 34 軒あり、その下に和紙漉(す)き作業をおこなう宿子と呼ばれる農家が約千軒あったという。このような江戸期の八尾町の繁栄と町民文化の面影は、現在もおこなわれている曳山祭の絢爛豪華な曳山に残っている。

明治に入って、1872 年(明治 5 年)、機械製糸工場「第一製糸場」が造られ、大正に入ると富山県原蚕種製造所が設立された。蚕糸業はアジア・太平洋戦争後、和紙業とともに急速に衰退していくが、現在でも、原蚕種製造所の跡地に建てられた曳山を展示する曳山展示館のなかに蚕糸業の展示室があったり、展示館脇の坂は「げんさんの坂」と呼ばれていたり、あるいは山間部の野積小学校の校章に稲穂と繭が組み合わされているといったように、さまざまなかたちで往時の歴史がとどめられている。和紙についても、かつての紙漉の技術を使って和紙の制作をおこなったり、八尾和紙の製品を展示したりする工芸館「桂樹舎和紙文庫」が、鏡町に立てられている。

行政的には、1889 年(明治 22 年)市町村制の施行により「八尾町」が設けられ、1953 年(昭和 28 年)に卯花(うのはな)村、杉原村、室牧(むろまき)村、保内(やすない)村、黒瀬谷(くろせだに)村の一部と合併し、さら

に 1957 年（昭和 32 年）には、野積（のづみ）、仁歩（にんぶ）、大長谷（おおながたに）の三村と合併して、八尾町は町域を広げた。さらに、2005 年（平成 17 年）4 月 1 日に、いわゆる「平成の大合併」によって、富山市、婦中（ふちゅう）町、大沢野町、大山町、山田村、細入（ほそいり）村の富山地域 6 市町村と合併して、富山市の一部となった。

大正期以降、生糸や養蚕の国際競争力の低下や洋紙の普及による和紙需要の落ち込みなどから、八尾の地場産業は次第に経済力を失い、また、交通網の変化によって交易の要衝としての商業的重要性も失われていった。アジア・太平洋戦争後、高度成長期になると、工業・商業の中心である富山市方面への人口移動が進み、山間部では林業が衰退した。

近年では八尾旧町では人口流出や商店街の空洞化が進行し、山間部では過疎化や少子高齢化が著しい。その一方で、平野部では先端技術産業によって地域振興がはかられている。1980 年（昭和 55 年）から、富山テクノポリス開発計画の一環として、中小企業基盤整備機構、富山県、当時の八尾町によって、平野部の保内（やすない）地区に内陸型工業団地である「富山八尾中核工業団地」の造成が始まり、企業の誘致が進められて、現在では電子部品や機械工作部品関連の企業が集まっている。旧町では、1986 年（昭和 61 年）に当時の建設省が提唱した地域振興策「HOPE 計画」に即して「八尾町 HOPE 計画」を策定し、1998 年（平成 1 年）からは、「八尾魅力あるまちづくり基本計画」にもとづいて、観光による地域振興や景観保存によるまちづくりの様々な施策が進められている。

2.3. 人口と産業

富山市の 2008 年（平成 20 年）12 月末現在の統計資料[1]によれば、八尾地域（旧八尾町）全体の世帯数は 6970 世帯、人口は 21790 人である。このうち、調査をおこなった八尾旧町の世帯数は 954 世帯、人口は 2658 人で、八尾地域全体に占める割合は、世帯が 13.7 パーセント、人口は 12.2 パーセントである。また、もっとも世帯数、人口が多いのは JR 越中八尾駅前に広がる福島（ふくじま）と上述の「富山八尾中核工業団地」を含む保内（やすない）地区で、2449 世帯、7420 人である。八尾地域（旧八尾町）全体の人口の 1925 年から 2005 年までの推移を図 3 に示したが、1950 年を境に周辺の村との再編合併にもかかわらず人口は減少し、1970 年代以降は「富山八尾中核工業団地」の建設と企業従事者の移入があっても、2 万 2 千人台で推移している。1980 年から 2000 年までの人口増減を地区別に見ると、保内などの平野部の人口が増加しているのに対して、八尾旧町と山間部の人口は著しく減少しており、全体としては増減が均衡している（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2004）。

[1] 富山市ホームページ　統計データ http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/　2009 年 1 月 24 日閲覧

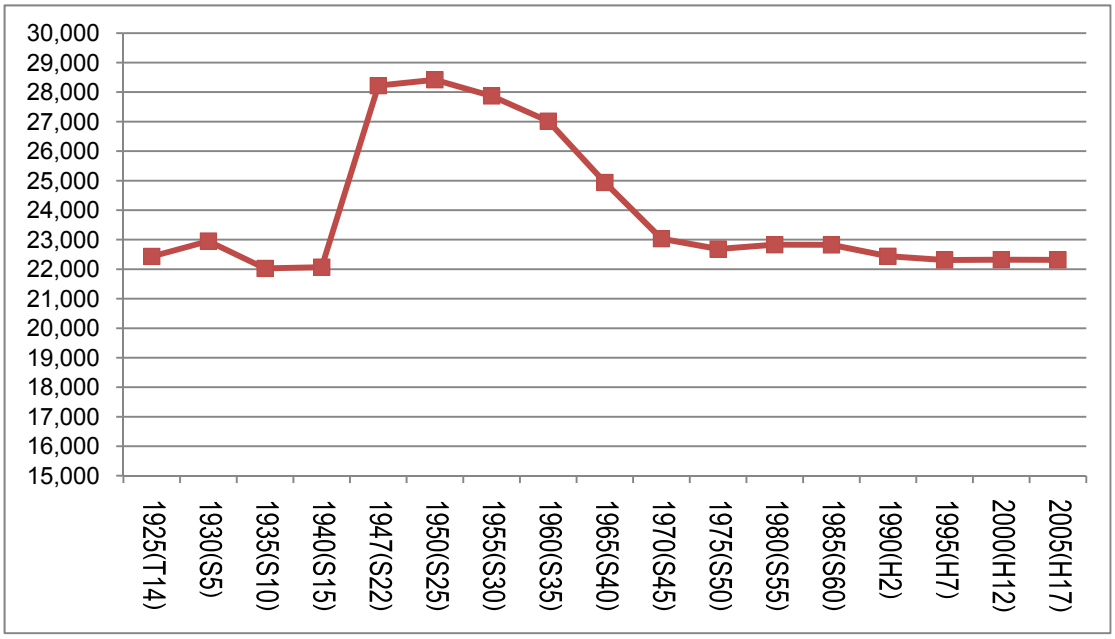

図 3. 旧八尾町全体の人口の推移

（『統計やつお』2003 及び富山市ホームページ統計データ
http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/　2009 年 1 月 24 日閲覧をもとに作成）

図 4 に旧町の 1960 年から 2005 年までの人口と世帯数の推移を示したが、旧町の人口、世帯数ともに 2000 年まで急激に減少し続け、2000 年以降は 3 千人を切ったあたりでほぼ横ばいになっている。

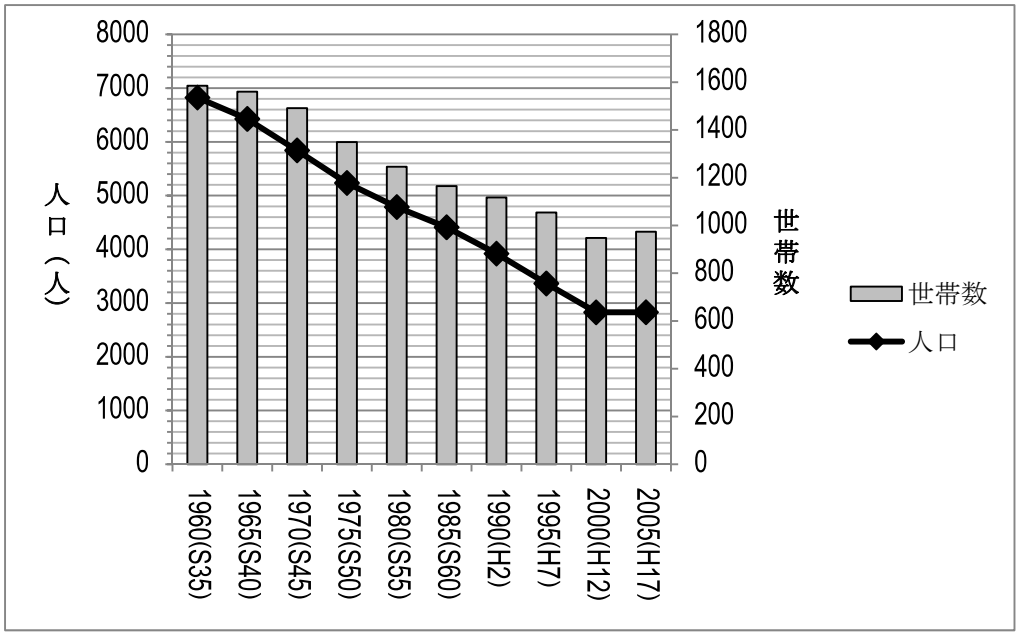

図 4. 八尾旧町の人口・世帯数の推移

（『統計やつお』2003 及び富山市ホームページ統計データ
http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/　2009 年 1 月 24 日閲覧をもとに作成）

2008 年（平成 20 年）12 月末時点での旧町の人口を世代別に見てみると（図 5）、20 歳未満の人口が全人口 2658 人のうちの 13.8 パーセントである一方で、65 歳以上の高齢世代が 33.2 パーセントを占め、高齢化が著しく進行している。また、20 歳から 39 歳の世代を除いて、どの世代も女性の方が多く、高齢化を反映して 65 歳以上の高齢者層では女性が男性の 1.5 倍を占めている。

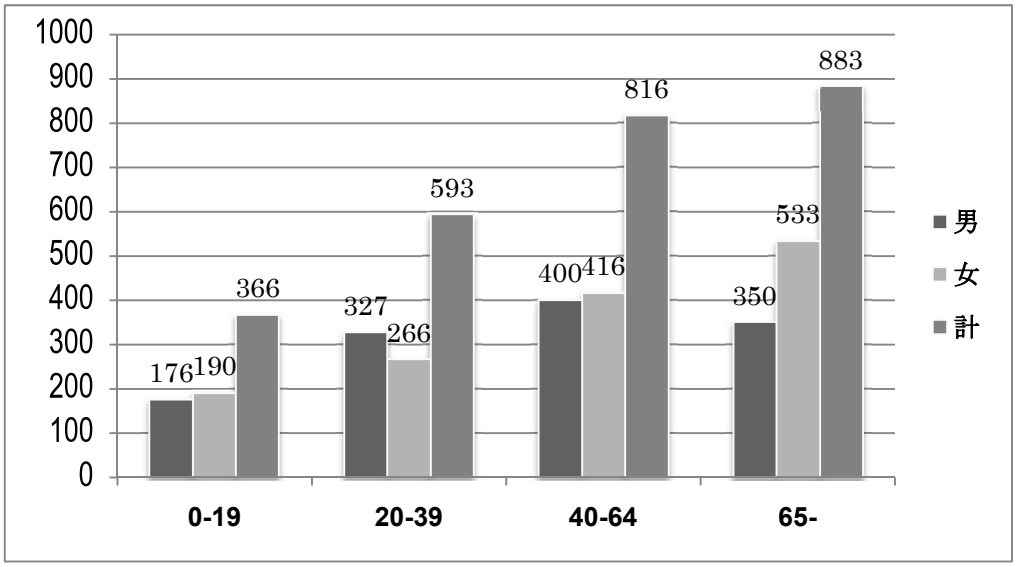

図 5. 八尾旧町の世代別人口構成

（富山市ホームページ統計データ http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/　2009 年 1 月 24 日閲覧をもとに作成）

また、小学校児童数について、1992 年の児童数を 100 とした場合、2004 年の時点で、旧町は約 7 割に減少している（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005）。

以上のように、八尾旧町では、2000 年まで人口が減少し続け、以降は顕著な減少は見られないものの、少子高齢化が進行している。

旧八尾町の資料（『統計やつお』）をもとに八尾地域の産業を概観してみると、2000 年度（平成 12 年度）の旧八尾町の就業者人口は 1 万 2 千人で、産業別の割合では、第 2 次産業と 3 次産業の就業者数が 47.5 パーセントずつで、第 1 次産業の就業者は 5%である（図 6）。

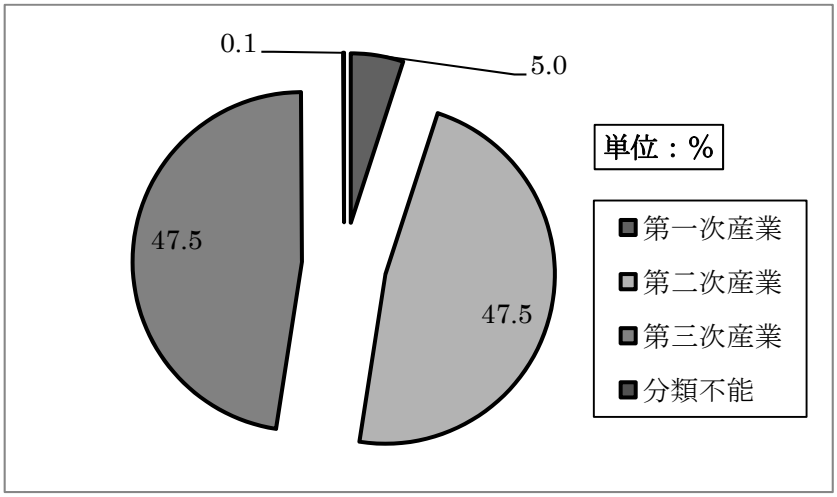

図 6　八尾地域の産業種別人口の割合

（『統計やつお』2003 をもとに作成）

第 1 次産業の就業者数は 596 人で、うち 577 人が農業に従事している。2000 年の時点で、旧八尾町の専業農家は 76 戸であるが、すべて旧町以外の地域の世帯である。野積地区には専業農家が 8 戸、農業を主な生業とする第 1 種兼業農家は 3 戸である。主要な農作物は米であるが、野菜、大豆、果樹なども作られている。

第 2 次産業の就業者 5696 人のうち、もっとも就業者数が多い業種は製造業で 3736 人が従事している。製造業の事業所は「富山八尾中核工業団地」がある安内や杉原などの平野部に集中している。

第 3 次産業の就業者 5697 人のうち、サービス業の従事者がもっとも多く 2767 人、次いで卸売・小売業・飲食業が 1830 人で、これらの業種の従事者が第 3 次産業の就業者の約 8 割を占めている。図 7 に、1991 年（平成 3 年）から 2002 年（平成 14 年）までの八尾地域全体の小売店の商店数と販売額を示したが、商店数、販売額ともに減少傾向にある。

旧町の西町はかつては商店が軒を並べる商店街であり、1972 年に八尾商工会に加盟している商店は 63 店舗あったが、2004 年には 35 店舗と激減している（東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005）。近隣への大型店舗の進出や人口流出などによって、八尾地域全体として小売業が衰退しつつあるが、とくに旧町では商店街の空洞化が問題となっており、後述するように、近年では、地域芸能の「おわら」を観光資源とするさまざまな地域振興策がとられるようになっている。

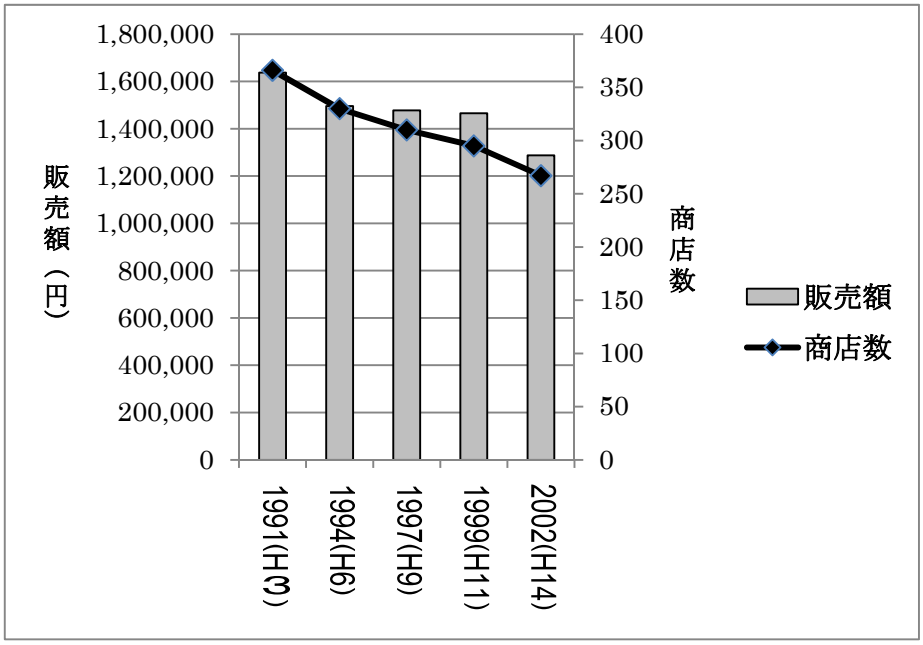

図 7. 八尾地域の小売り商店数と販売額の推移（1991-2003）
（『統計やつお』2003 をもとに作成）

2.4　八尾旧町と福島の概要

この小論でとりあげる「おわら風の盆」がおこなわれるのは、旧町と福島地区であるので、以下に、旧町と福島地区について詳述したい。

井田川沿いの河岸段丘の約 1 平方キロの狭い土地に家屋が密集している地域が旧町であり、10 の町で構成されている（図 8）。河岸段丘は北東から南西に向けて勾配が強くなり、JR 越中八尾駅から「坂のまち大橋」を渡って旧町に入ると、上がり坂が続く。

図 8. 八尾旧町と福島地区
（「おわら風の盆行事運営員会」のガイドマップをもとに作成）

八尾の旧町は、浄土真宗の聞名寺（もんみょうじ）の門前町である今町が井田川の河岸段丘の北東部の低い場所にでき、以降は表 1 のように、南西部の高部へと町が広がっていき、あわせて、今町よりも低い場所にも町ができて、順次、10 の町が形成されて、現在に至っている。本稿でとりあげる「おわら風の盆」はこの 10 の町が主体となっておこなわれる年中行事であり、演奏と踊りから成る民俗芸能である「おわら」は、各町の歴史や特徴を反映したものとなっている。以下に、段丘の勾配の高いところにある町から順に、町の特徴について紹介しておきたい。

表 1. 旧町 10 町の成立

（長尾、1994 をもとに作成）

年	町の成立
1636（寛永 13）年まで	今町（初めは中町）
1637（寛永 14）年秋まで	東町と西町
1664（寛文 4）年	南新町（後の上新町）。ただし、その後、取りつぶし
1672（寛文 12）年	鏡町
1677（延宝 5）年	下新町
1690（元禄 3）年	南新町再成立、上新町と改名
1745（延享 2）年	諏訪町
1793（寛政 5）年	西新町と東新町
1798（寛政 10）年	川窪新町、1890（明治 23）年に天満町と改名

丘陵の一番高いところにある東新町（ひがししんまち）と西新町（にししんまち）は、町の歴史が比較的に新しいために「新屋敷」と呼ばれている。東新町には蚕養宮（かいこのみや）とも呼ばれる若宮八幡社があり、養蚕が盛んだった当時は参拝者で賑わったという。2008 年 12 月末現在の東新町の人口は 57 人と旧町のなかでもっとも少ない。

諏訪町（すわまち）は、かつては職人町で、1986 年（昭和 61 年）に町の本通りが当時の建設省と『「道の日」実行委員会』によって「日本の道百選」に選ばれた。上新町（かみしんまち）は、旧町のなかでもっとも人口が多い町であり、数十軒の商店が立ち並ぶ商店街である。道幅が広いために、9 月に開催される「おわら風の盆」の行事の際には観光客を交えて輪になって踊る輪踊りが行われたり、「なりひら風の市」というイベントが開催されたりしている。また、かつての富山県蚕業試験場（富山県原蚕種製造所の後進）の跡地に、「越中八尾観光会館」（曳山展示館）が立てられている。鏡町（かがみまち）は、かつてのいわゆる花街で、昭和初期には芸妓が生活する置屋や料亭が並び、劇場や寄席もあった。他の町に比べて入り組んだ細い道が多い。

東町（ひがしまち）は、江戸時代に大きな商家が立ち並んでいたために、「旦那町」と呼ばれていた。大正時代に前出の「おわら風の盆」を町ぐるみの行事に変えた川崎順二はこの東町の出身で、宅地跡に「おわら資料館」が建てられている。西町（にしまち）は、隣の東町と同じく、大きな商家が並んでいたかつての「旦那町」で、現在でも造り酒屋や呉服屋などに昔の面影

を見ることができるが、すでに触れたように、1972 年と比べると商店数は半減しており、商店が軒を連ねる商店街としての姿は失われつつある。

今町は、浄土真宗の聞名寺の門前町で、すでに歴史の項で触れたとおり、八尾旧町のもととなった町である。1636 年の八尾旧町の成立以前は中町と呼ばれていた。下新町は、かつては真言宗の蓮勝院の門前町で、明治の神仏分離令の際に蓮勝院は解体され、現在は八尾旧町の鎮守である八幡社が建っている。天満町は、周囲を川で囲まれていたために町ができた当初は川窪新町という町名であったが、明治に入ってから町内にある天満宮にちなんだ町名に改名した。

以上、旧町を構成する 10 町について記述したが、JR 越中八尾駅前に広がる福島地区は、もとは旧町からの移住者によって開かれた地区であるが、2008 年 12 月末の時点で旧町全体の人口を越える 3 千人の人口を擁している。

表 2.　2008 年 12 月現在の旧町 10 町の世帯数と人口
（富山市ホームページ　統計データ http://www3.city.toyama.toyama.jp/jinkou/　2009 年 1 月 24 日閲覧　をもとに作成）

町名	世帯数	男	女	計
東町	102	131	159	290
西町	121	160	194	354
鏡町	126	160	182	342
上新町	155	192	223	415
諏訪町	87	124	131	255
西新町	121	140	137	277
東新町	22	27	30	57
今町	33	49	61	110
下新町	124	168	163	331
天満町	63	102	125	227
合計	954	1,253	1,405	2,658

表 2 に 2008 年 12 月末時点での八尾旧町 10 町の世帯数と人口を示したが、町域の狭い東新町、今町の人口が少ないことが目を引く。東新町では、「おわら風の盆」の行事を住民だけでは維持できなくなり、地域外の人たちの協力を得ている[2]。

[2] 北日本新聞　2008 年 9 月 3 日「有志応援、深まる絆　人口減の富山・八尾町東新町、町外からおわら参加」

3.「おわら」における「伝統」の創造

「おわら風の盆」は、八尾地域で 9 月 1 日から 3 日の間におこなわれる祭礼である。前述のように、この行事を行っているのは「旧町」と呼ばれる 10 町と JR 越中八尾駅付近の福島をあわせた 11 町である。

「おわら風の盆」は八尾旧町の年中行事であるとともに、踊りや演奏を披露する行事でもある。年中行事としての「風の盆」は、暴風を吹かせて農作物に被害を与える悪霊を「二百十日」に歌と踊りで鎮める風鎮行事であるというのが通説であるが、八尾旧町は交易や養蚕・和紙などの地場産業で栄えた町であるので、むしろ祖霊を供養する盂蘭盆との関係が深いとも考えられている。

ここでは、年中行事としての「おわら風の盆」と民俗芸能である「おわら」を区別して、民俗芸能としての「おわら」の「伝統」がどのように創出されてきたかについて記述したい。

「おわら」の起源は、江戸時代の元禄期であると伝えられている。町外に流出していた八尾旧町の建設の許可書「町建御墨付文書」を町に取り戻したことを喜んで、町民が三日三晩踊り明かしたことに由来すると言われているが、はっきりとしたことは分からない。

また、「おわら」の語源についても、江戸時代の文化年間に、遊芸者たちが滑稽な格好をして、歌に「おわらひ」という言葉を入れながら町を練り歩いたが、その「おわらひ」が元となったという説や豊年を意味する「大藁」（おおわら）に由来するという説、あるいは、「小原村」出身の娘が女中奉公をしている際に美声で歌った子守歌が起源だという説などがあり、確実なことは分かっていない。

「おわら」は踊り手と地方で構成されるが、地方は唄や囃子を含めて伴奏をおこなう人たちで、「唄い手」、「囃子方」、三味線、胡弓、締め太鼓の 5 つのパートで構成される。「おわら」は、踊り手が伴奏する地方とともに踊り歩く芸能であるが、この町を踊り歩くことを「町流し」と呼ぶ。「町流し」の原型は江戸時代の元禄頃に生まれたという。なお、江戸期の「おわら」は現在のように優美さを前面に出すものではなく、交通の要衝として栄えていた八尾旧町の豪壮な町人文化を反映して、野趣を興じるものであったと伝えられている。

明治時代の中ごろまで、「おわら」は唄だけの民謡であり、その後、尺八と三味線が加わるようになり、しばらくして、尺八の代わりに胡弓が用いられるようになった。さらに、1911 年（明治 44 年）、現在の北日本新聞の前身である新聞『北陸タイムス』の千号紙発行の記念として、「おわら」の踊りを披露するという行事があり、旧町鏡町の芸者たちが即興で踊った。これが契機となって、「おわら」に踊りが加わるようになる。

1913 年（大正 2 年）に、北陸線が新潟県の直江津まで開通した記念事業として富山県が 50 日間に渡る大きなイベントを主催し、そこで「おわら」を披露することとなった。その際に、三味線の師匠であった江尻せきが中心となって、それまでの芸者の踊りは所作が難しかったため、深川踊りやカッポレなどを参考に農作業の動きを踊りの流れのなかに取り入れて、単純明快で活発な振り付けで誰でも楽しめる「豊年踊り」を作り上げた。この踊りは、次に述べる「新踊り」が誕生してからは「旧踊り」とも呼ばれている。

大正時代の中期、1919 年（大正 8 年）、八尾に「おわら保存会」が発足した。これは現在の「富山県越中民謡おわら保存会」のもととなった組織である。初代会長は医師の川崎順次（かわさきじゅんじ）であったが、彼の指導で「おわら」の踊りは大きく変化した。当時は若い娘を人目に触れさせるのを嫌がる風習があったため、いわゆる花街であった鏡町の芸者たちが踊り手となっていた。しかし、川崎順次は自分の娘たちを積極的に踊りに参加させ、それを他の町民が見習って娘を踊りに出すようになったという。こうして、豊年踊りの創作とともに、「おわら」は次第に多くの住民たちが参加する芸能に変わっていく。

1928 年（昭和 3 年）、川崎順次は、それまで卑猥な表現が含まれていた「おわら」の歌詞（「おわら古謡」）を変えようと、知人の画家である小杉放庵に依頼して歌詞の創作を依頼した。こうしてできあがったのが、「八尾四季」と呼ばれる「新作おわら」であり、以降、野口雨情、佐藤惣之助、水田竹圃（みずたちくほ）、高浜虚子、長谷川伸、小川千甕（せんよう）、林秋路（あきじ）など、八尾を訪れた文人たちが寄せた歌詞によって、「新作おわら」は充実していくことになる。

また、川崎順次は、1929（昭和 4）年、東京三越で富山県の物産展即売会での「おわら」の披露に際して、当時、新進の舞踏家であった若柳吉三郎（わかやぎよしざぶろう）を八尾に招いて、新作「おわら」に合わせた踊りの振り付けを依頼した。こうして新しく作られたのが「新踊り」と呼ばれる踊りである。「新踊り」には、所作の振りが大きく勇猛な「男踊り」と「八尾四季」にあわせて春夏秋冬それぞれに異なった所作が入れられた「女踊り」（「四季踊り」とも呼ばれる）の二つがあったが、当時は「男踊り」が踊られることはなく、男性が実際に踊りに加わるようになるのは後年になってからである。「女踊り」は日本舞踊の典雅な趣きを取り入れたもので、このため、町民の娘たちが積極的に踊りに参加するようになった。また、踊りが優雅さをモティーフとするようになったのにあわせて、地方は尺八を胡弓に変えて哀愁が漂う調べを奏でるようになった。こうして、芸者の芸や猥雑な歌詞で構成されていた「おわら」が、社会の変化に合わせて、住民たちが広く参加できる芸能となり、さらに、八尾を越えて楽しまれる芸能へと変化していったのである。

以上のように、大正から昭和初期にかけて、「豊年踊り」（旧踊り）と「新踊り」（「男踊り」と「女踊り」）が創られたが、現在では、「豊年踊り」は主として町流しや後述する輪踊りで踊られ、「新踊り」は主にステージなどで披露されている。なお、踊りの所作は、旧町を構成する 10 町のそれぞれで工夫が加えられて、すでに紹介した各町の歴

史を反映した町ごとの独特の特徴を持つようになっている。

このように、現在の民俗芸能としての「おわら」は、大正から昭和初期にかけて、八尾が日本の他の地域に開かれていく社会経済的状況の中で産み出された文化であり、八尾旧町の住民はそのような新たに創出された文化に主体的に関わり、また、町ごとの歴史文化的特徴を踊りの所作を通して自他に表象することによって、この新たな文化を自らの「伝統」として引き受けたのである。

4. 「おわら風の盆」の観光化

次に、年中行事である「おわら風の盆」の観光化について概要を記述したい。

1946 年（昭和 21）年には、9 月 1 日に 4 万人、2 日に 3 万人の計 7 万人が「おわら風の盆」に訪れたというが、アジア・太平洋戦争の敗戦直後であるにもかかわらず、富山県下だけではなく、東京や大阪方面からも観光客が押し寄せたという[3]。

1950 年（昭和 25 年）に、八尾に観光協会が設立されたが、当時は、3 日間の「おわら風の盆」に 15 万人の観光客を誘致することが目標であったという。そのため、富山市内、城端、魚津、氷見などの富山県内各地と金沢、高山と八尾の間に観光客のための臨時列車やバスが用意されたり、旧町の各所に無料休憩所が設けられた。このように、1950 年代から、八尾旧町の年中行事である「おわら風の盆」を観光資源として、観光客誘致の施策や観光客の利便のための工夫が投じられるようになった。言い換えれば、1950 年代から、「おわら風の盆」の本格的な観光化が始まったのである。

1952 年（昭和 27 年）、第 3 回全国民謡大会で「おわら保存会」が民謡舞踊部門で優勝し、翌年の第 4 回大会では民謡唄部門でも優勝し、「おわら風の盆」に全国の注目が集まることとなった。こうして、「おわら風の盆」に訪れる観光客はうなぎ登りに増えていくことになる。

1985 年に出版された高橋治の小説「風の盆恋歌」がベストセラーとなったことがきっかけとなって、「おわら風の盆」はさらに全国的に知られるようになった。この小説は、おわら風の盆の時期の八尾を舞台として描かれた恋愛小説で、「おわら風の盆」についての情緒あふれる描写が当時の多くの読者を魅了したという。さらに、この小説がテレビドラマ化され、1989 年には歌手の石川さゆりが同名の歌謡曲を歌って、さらに八尾と「おわら風の盆」の名が全国に広く知られるようになった。

[3]昭和 21 年 9 月 2 日付 北日本新聞による

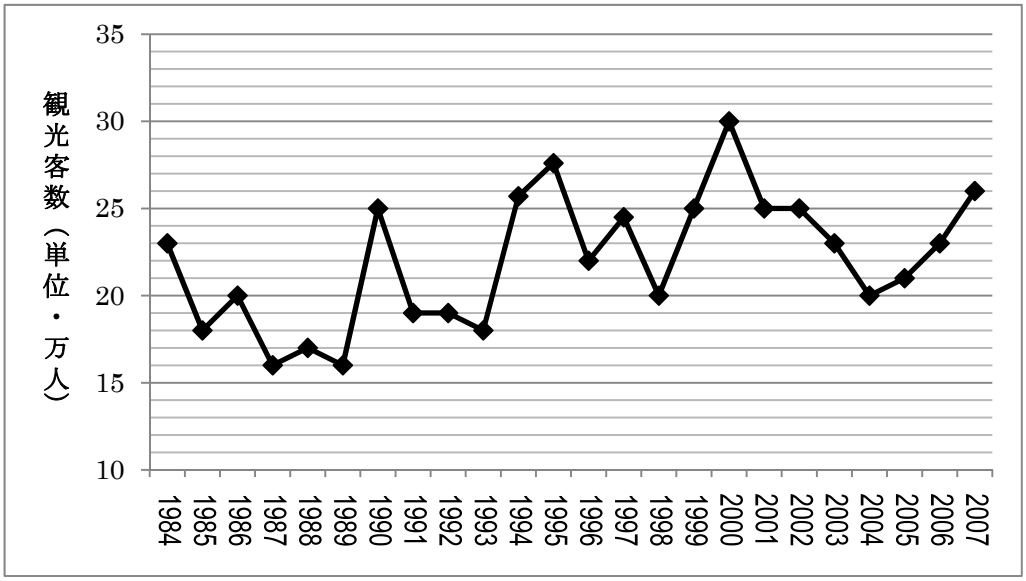

図 9. 「おわら風の盆」の観光客数（1984-2007）

図 9 に 1984 年から 2007 年までの「おわら風の盆」の観光客数を示したが、この図からは、小説、ドラマ、歌謡曲などによって知名度があがったために、急激に観光客数が増加したとは言えない。むしろ、小説などで有名になる前から、観光協会の努力などによって、現在と変わらない規模の観光客が「おわら風の盆」にやってきていたことが分かる。ただし、全国的に知られるようになり、富山県内あるいは北陸の観光地の一つに「おわら風の盆」を組み込んだパッケージツアーの普及もあって、1994 年以降は観光客数が 20 万人を下回ることはなくなっている。なお、図 9 のとおり、観光客数の年較差は大きいが、これは、「おわら風の盆」は、平日でも開催されるため、また、雨天の場合は順延されずに中止されるからである。開催期間中に休日が含まれるかどうかや開催期間中の天候によって、観光客数は大きく左右されるのである。

2008 年の「おわら風の盆」の観光客数は、平日開催に加えて降雨の影響があって約 20 万人だったが[4]、旧町の人口は 3 千人程度で、しかも旧町の面積は約 1 平方キロであるので、開催期間の 3 日間に、少なくとも旧町の人口の 60 倍以上の観光客が丘陵の上の狭小な町に押し寄せていることになる。

---

[4] 北日本新聞　2008 年 9 月 4 日朝刊　「おわら名残尽きず　3 日間で 20 万人」

5. 「おわら」と観光振興

観光客の増加に伴って、八尾旧町の民俗芸能である「おわら」に「見せるイベント」の要素が加わっていく。

1935 年（昭和 10）年に聞名寺の境内で「おわら風の盆」の期間中に各町ごとに舞台踊りを披露する「おわらの競演会」が始まり、これを見に来る観光客が年々増えていった。1961 年（昭和 36 年）には、聞名寺の境内では観光客を収容しきれなくなったために、競演会場は聞名寺から町営グラウンド（現在の八尾小学校グラウンド）に移転された。1970 年代に入ると、競演会場は「演舞場」と名前を変えて入場料を取るようになったが、住民たちによれば、競演会が開かれていた当時は、自分たちの「おわら」を観光客に「見てもらう」という意識が強かったという。1970 年代以降、「おわら」の競演は、観光客からの入場収入を目的とした「見せる」演舞へと代わっていった。

2008 年（平成 20 年）現在では、「おわら風の盆」の開催中の 9 月 1 日と 2 日に八尾小学校のグランドに「おわら総合演舞場」の特設ステージが設けられて（写真）、午後 7 時から 9 時まで、「おわら風の盆」を開いている 11 の町ごとに舞台踊りが演じられている。2007 年（平成 19 年）では、「演舞場」には 9100 席が設けられ、そのうち 5500 席が指定席で見やすさから A 席と B 席に分けられてる。自由席も含めてすべて有料であるが、2006 年（平成 18 年）から、全国チェーンのコンビニエンスストアで前売り券が発売されるようになった。コンビニエンスストアでの発売を開始した 2006 年（平成 18 年）には、発売開始 30 分で A 席の前売り券が完売となり、2007 年（平成 19 年）には 10 分で売り切れたという。また、現在の「おわら風の盆」の収入総額の約 8 割が、この演舞場の入場料収入だという（渡辺、2008）。

写真 演舞場
（渡辺佳央里撮影）

有料の演舞場とは別に、2001 年（平成 13 年）には、「おわら風の盆」を開いている 11 町の 5 カ所に無料で「おわら」を鑑賞できる特設ステージが設置された。設置されたのは、福島地区の八尾駅前、下新町の八幡社、東町にある観光情報や学習情報を提供するマルチメディア施設「八尾ふらっと館」、上新町の越中八尾観光会館、諏訪町の諏

訪社で、会場によって 2 日間、あるいは 3 日間、決められた時間に「おわら」が上演される。

以上、「おわら風の盆」の観光化について記述した。「おわら風の盆」は各町ごとに自由に「町流し」や「輪踊り」をおこなう行事であるが、観光客の誘致と増加に伴って、観光客が「おわら」を鑑賞しやすいようにステージが設けられ、あらかじめ決められたプログラムで「おわら」を演舞するという観光客向けの工夫がなされるようになり、また、入場料が観光収入の大きな部分を占めるようになった。

このように、住民の年中行事であった「おわら風の盆」は、現在では「見せるためのイベント」としての側面を強く持つようになっているのである。

また、約 1 平方キロメートルの狭い八尾旧町が人混みで埋め尽くされるほどの観光客が「おわら風の盆」に訪れるようになると、行事自体の遂行が困難になってきたため、また、大量のゴミの放置などの観光被害が著しく増加するようになったため（安田,2009）、観光客の分散が課題となってきた。その対応策として、1982 年（昭和 57 年）から、「おわら風の盆」の前に「前夜際」がおこなわれるようになった。当初は 1 日 2 町ずつの 6 日間行われていたが、翌年からは 1 日 1 町内ずつ、午後 8 時から 10 時まで「輪踊り」、「舞台踊り」、「町流し」を披露するようになり、8 月 20 日から 30 日までの 11 日間が前夜祭期間となった。ただし、町ごとに演舞の順序などを決めるためプログラムはなく、また、降雨の場合は中止となる。観光客があまりにも多い場合は、近隣の町が協力して演舞をおこなって、観光客を分散させる。

さらに、1987 年（昭和 62 年）からは、前夜祭期間中に「おわら鑑賞・踊り方教室」が、前夜祭の前の時間帯に越中八尾観光会館のホールで開催されるようになった。この「教室」では、「おわら」の踊りのなかでもっとも踊りやすい「豊年踊り」（旧踊り）の解説が椅子に座ったままの観光客の手振りの練習も加えておこなわれる。これは、観光客に踊りの基本を教えて、観光客たちがその後の前夜祭会場での「輪踊り」に参加できるようにする一種のサービスである。解説と練習の後は、前日の前夜祭をおこなった町による舞台踊りが披露される。この「教室」は有料で、やはり、全国チェーンのコンビニエンスストアで前売り券が発売されている。

以上のように、「おわら風の盆」に集中する観光客を分散させるために、11 日間を費やして「前夜祭」や「おわら鑑賞・踊り方教室」が開催されるようになったが、一方で、1990 年代末以降、「おわら」の芸能を観光資源として人口流出や近隣への大型店舗の進出による旧町の空洞化に対する地域振興に活用しようとする動きが活発に見られるようになる（中部開発センター、2005）。

1998 年（平成 10 年）からは、9 月最終の土日曜か 10 月最初の土日曜に、「おわら」を披露する「月見のおわら」が始められた。「月見のおわら」は、もともと、風の盆が終わって一息ついたころの十五夜に、住民たちが旧町の脇の城ヶ山（じょうがやま）で満月を見ながらひっそりとおこなっていた行事だという。この行事に目をつけた旅行代理店が「おわら風の盆」を再現する観光イベントして企画し、観光協会との共催で開かれるようにった。当初は、「おわら風の盆」での観光客への対応に疲れた住民の間から開催に不満の声が

あり、旧町と井田川を挟んで反対側にある町民広場を会場として開かれていたが、現在では、上新町と諏訪町でおこなわれるようになっている。

2000 年（平成 12 年）からは、毎月第 2、第 4 土曜日の午後 1 時半から 2 時半まで、越中八尾観光会館内のホールで、観光協会が富山県民謡越中八尾おわら保存会の協力を得て、「風の盆ステージ」というイベントを始めた。これは、「おわら」の歴史や踊りの解説を挟みながら、「おわら」の芸能を披露するイベントで、プログラムの最後は観客も加わる「輪踊り」で締めくくられる。このイベントでは、深夜の「夜流し」を大スクリーンに映し出すなど、「おわら風の盆」の雰囲気をかもし出す工夫が随所になされていて、「おわら風の盆」行事をダイジェスト化しつつ、また、観光客が求める「優雅さ」に応えるコンテンツを提供している。2003 年（平成 15 年）からは、風の盆ステージに合わせて、毎月第 2 土曜日に、商店街の活性化と地域交流を目的とした露店市の「なりひら風の市」が、上新町商工振興協同組合を中心として、上新町で開かれるようになった。

以上のように、現在では、「おわら」を観光資源として地域活性化のために活用し、「おわら風の盆」への観光客の過度の集中を回避しながら、「おわら風の盆」以外の時期にも観光客を誘致しようとする「通年観光化」の方策がさまざまなイベントの実施というかたちで精力的に進められている。この取り組みの成果は、図 10 に示したように「おわら風の盆」以外の時期の観光客数の増加となってあらわれ、2001 年（平成 13 年）以降は、おわら風の盆以外の時期に八尾を訪れる観光客数が、「おわら風の盆」の観光客数を上回るようになった。2007 年度(平成 19 年度)では、「おわら風の盆」の期間の観光客数は約 26 万人で、風の盆以外の時期の観光客数は約 41 万人であり、「おわら風の盆」の観光客の約 1.6 倍の観光客が「おわら風の盆」以外の時期に訪れている。

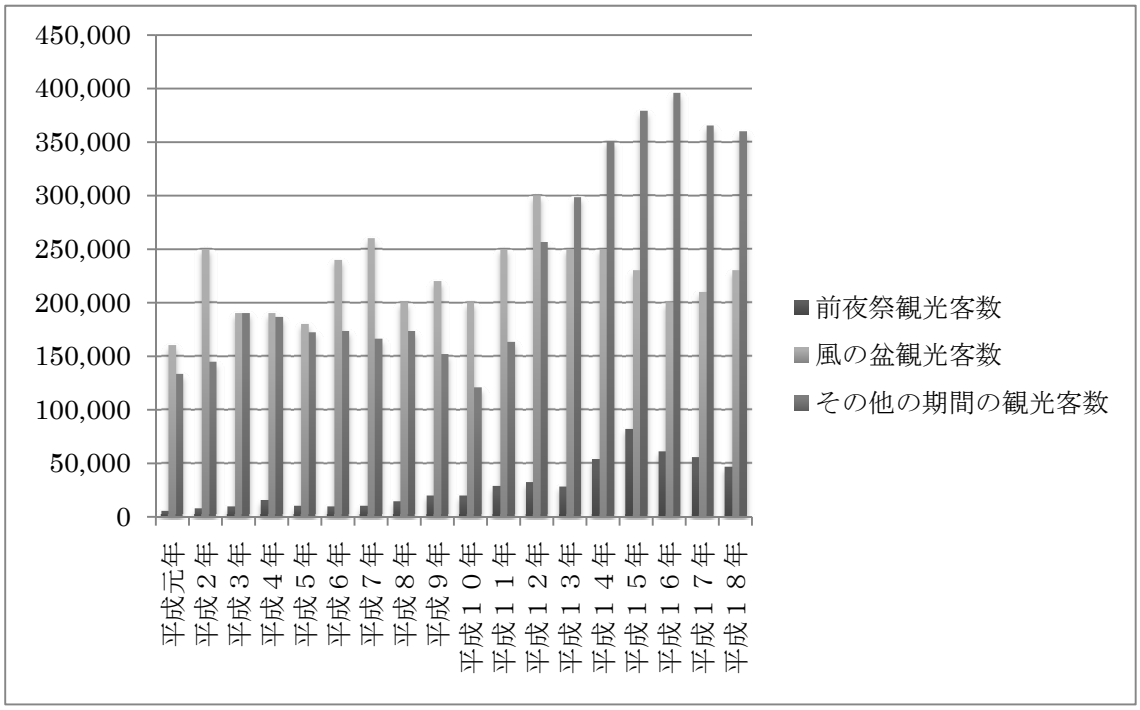

図 10.「おわら風の盆」と前夜祭及び他の時期の観光客数（渡辺、2008 より）

「おわら風の盆」の行事は、八尾町商工会、越中八尾観光協会、富山市八尾総合行政センター農林商工課（2005 年の合併前までは八尾町商工観光課）から構成される「おわら風の盆 行事運営委員会」によって運営され、「富山県民謡越中八尾おわら保存会」の 11 の支部が参加して、練習や準備をおこなうというかたちでおこなわれている。「富山県民謡越中八尾おわら保存会」の 11 の支部は旧町の 10 町（東町、西町、今町、上新町、鏡町、下新町、諏訪町、西新町、東新町、天満町）と旧町内から移り住んだ人たちが多く 1956 年（昭和 31 年）から「おわら風の盆」に参加するようになった JR 越中八尾前の福島地区の 11 地区に設けられている。「富山県民謡越中八尾おわら保存会」は、この 11 地区の代表者から構成されていて、「本部」と呼ばれている。ただし、「本部」と「支部」の間にヒエラルキー的な関係はなく、「おわら」の練習や風の盆の準備は各支部が自主的におこなっている。

「おわら風の盆」は、上記の 11 の町の行事であり、基本的にはこれらの町の住民の主体的な参加と協力によって行事は進められる。「おわら」の伝承や練習なども、各町の住民の間でおこなわれる。しかし、八尾旧町には、「おわら」を習いおぼえたい町外の住民や八尾への転入者などが加入している相互学習のサークルがあり、現在のところ、部分的なかたちではあるが、「おわら風の盆」にも参加している（尾堂、2008）。

八尾旧町の「通年観光化」は、上述のように、さまざまなイベントを催している越中八尾観光協会が推進している。この協会は、1999 年までは旧八尾町から観光振興の補助金を受けていたが、財政悪化のために補助金は打ち切られて、自主運営となった。さまざまなイベントの実施によって自主財源を確保し、2005 年（平成 17 年）からは有限責任中間法人として法人格を取得している（中部開発センター、2005）。また、2003 年（平成 15 年）には、観光協会が主体となって、行政やイベントを実施している他の組織との連携のための「八尾町観光イベント連絡協議会」が設立されている。観光協会は、このような組織を通じて、行政と協力しながら観光振興に取り組んでいる。

また、八尾町商工会も、商店街の活性化のために、「なりひら風の市」などのイベントに協力し、観光客向けに八尾特産品の店や飲食店、旅館などの紹介などをおこなっている。

行政で観光振興に関わっているのは、八尾総合行政センター（旧八尾町役場）の農林商工課と建設課である。農林商工課では、「おわら風の盆」や曳山祭の宣伝やイベントの補助をおこなっている。建設課は、町並みと景観の整備を行っている。観光協会がイベントの開催といったソフト面で通年観光化を推進しているのに対して、行政では、建設課が中心となって、行政でしか施策を講じることができない町並み・景観整備というハード面で、通年観光化のいわばインフラ整備をおこなっている。

なお、1980（昭和 55）年から平野部の保内地区に「富山八尾中核工業団地」の造成が始まったことを契機に、1985 年（昭和 60 年）から 5 年間、通産省と八尾町の主催で、「最先端技術と伝統文化の融合」をテーマとする公開討論会「八尾町文化会議」が開催された。この会議においても、「八尾の伝統的な町並み」の再認識と再創出が提唱されている（中部センター、2005）。なお、「八尾町文化会議」の議論を引き継いで八尾の活

性化を考える住民の自主的組織「坂のまち千年会議」が、1991 年（平成 3 年）に設立されている。

八尾の「伝統的な町並み」は「おわらが似合う町」というモティーフで進められているが、このような施策や計画の契機となったのは、1986 年（昭和 61 年）に当時の建設省が発表した「HOPE 計画」という地域振興プランである。この計画は、住まいづくりやまちづくりをその土地の文化や歴史を活かしながら、「良好な住宅市街地」、「地域文化の育成」、「地域住宅生産の育成」などをはかるというものであった。当時の八尾町は、「HOPE 計画」をもとに、1986 年（昭和 61 年）に「HOPE 計画推進協議会」を設置し、八尾らしいまち並みの再生と快適な住環境の創出を図ることを目的とした「八尾町 HOPE 計画」を策定した。また、住まいを取り巻く環境について広く住民と意見を交換する「HOPE 計画町民会議」が 3 年に 1 回の割合で開催された。

1998 年（平成 1 年）からは、1986 年（昭和 61 年）に旧町の諏訪町の本通りが「日本の道 100 選」に選ばれたれたことを背景に、「おわら風の盆、曳山にふさわしいまちづくり」をテーマとして「八尾魅力あるまちづくり基本計画」が策定された。計画に沿って 1990 年（平成 2 年）から 1999 年（平成 11 年）まで「八尾町歴史的地区環境整備街路事業」によって、「八尾らしい景観」の維持と創出のためのさまざまな事業がおこなわれた（八尾総合行政センター建設課、2000,2007）。「八尾らしい景観」には「おわら」をモティーフにしたものが多い。たとえば、2003 年（平成 5 年）に竣工した井田川にかかる禅寺橋は、欄干に「おわら」のレリーフが施され、編み笠を模した街灯が設置され、さらに橋の中央には踊り場が設けられている。

これらの事業によって、「おわら風の盆」以外の時期にも観光客を吸引するための景観整備が旧町を中心に進められ、現在も家並みの整備や創出の事業が継続されている[5]。

6. 自律的な観光文化と新たな伝統の創出

八尾の「伝統芸能」としての「おわら」は、すでに見たように、大正から昭和初期にかけて、八尾が日本の他の地域に開かれていく社会経済的状況の中で産み出された文化であり、八尾旧町の住民は主体的にその文化を受容し、自らのものとすることによって、八尾旧町の「伝統」として自他に表象する芸能として定着させた。

しかしながら、そのようにして八尾の住民たちの間に定着した文化であるがゆえに、「おわら」を観光資源として人口流出と商店街の空洞化が進む八尾旧町の地域振興に活用する近年の大規模観光化は、ゴミの放置などの観光被害の面にとどまらず、さまざま

---

[5] 八尾旧町の景観整備施策に対する住民の認識については、後藤あかね・島田一、2009、「八尾旧町の景観づくりと住民」、『『地域社会の文化人類学的調査 18 富山県八尾町の祭と観光—伝統と現在を生きる人々』、富山大学人文学部文化人類学研究室　に詳細な記述がある。

な課題を住民の文化に投げかけている。

たとえば、八尾旧町の住民にとって、「おわら風の盆」の時期に、観光客が少なくなった深夜に催す「夜流し」（各町を踊り歩く行事）は、かつては、多数の観光客の視線に晒されずに、「見せる」イベントとしてではなく、自分たちの年中行事として興じることができる行事であったが、現在ではこの行事が広く知られるようになって深夜まで多くの観光客が見物し、また、すでに見たように、この「夜流し」の映像は「風の盆ステージ」というイベントの一環として、一年を通じて観光客に提供されている。

「おわら」をモティーフとした通年観光のためのイベントや景観づくりも、住民に対して、一年を通して観光客に接し、「おわら」の観光化に伴って流布された「優雅さ」のイメージ（図 11 参照）を求める観光客の視線を日常生活の中で受け止めなければならない状況をつくりだしている。

図 11. 越中八尾観光協会　おわら風の盆ポスター2008

また、「おわら保存会」の本部は、東京から声楽や三味線の専門家を招へいして、「おわら」の音楽面での技術向上をはかろうとしている。このような試みは、地域固有の技法と住民の評価によって成り立っている民俗芸能に、外部の標準化された技術と技術評価を持ち込むことになると考えられる。

大正から昭和にかけての近代化の波のなかで、八尾が外部に開かれていく過程において、新しい「芸能」としての「おわら」が誕生し、住民たちはその「おわら」を自らの「伝統」として主体的に受容した。この受容の過程は、八尾の花街の芸者と客などの限られた人々の間の芸能であった「おわら」が八尾旧町の住民たちに広く開かれて大衆化していく過程でもあった。観光化との関わりについて言えば、住民の主体的な受容によって「おわら」が八尾旧町の一般住民の文化となり、地域芸能として洗練される過程があったからこそ、観光資源としての価値が創出されて、地域外の人々を観光客として吸引することになったのだと言える。

しかし、通年観光化や景観創出などの施策によって大規模な観光化が進行し、かつてとは比較にならないほどに「おわら」が外部に「開かれた」現在の状況において、果たして、住民が主体的にこの状況に対応して「おわら」の「新たな伝統」を創出していくことができるかだろうか。

この問題は、住民にとっての課題であるだけでなく、地域振興に「おわら」を活用しようとしている行政の大きな課題であろう。「おわら」が地域芸能である限り、住民の主体的な参与が不十分なままにイベント化だけが一方的に進行すると、「おわら」は活力を失って、かえって観光資源としての価値や有用性が下落する。住民が主体的に観光客の視線を捉え直して、自律的な観光文化としての「おわら」、いわば「住民が見せるおわら」が再創造されて八尾の新しい「伝統」となりうるかどうか、また、そのような文化の再創造を担保する条件と環境を行政が整えることができるかという課題が、現在、問われていると考えられるのである。

また、「おわら」が外部に向かってより「開かれる」ことによって生起している課題は、一方で、「おわら」をおこなう主体となるコミュニティの問題でもある。他地域からの移住者や他地域の居住者で「おわら」に傾倒している人々が「おわら」の学習サークルをつくっていることはすでに記述したが、このような人々の「おわら風の盆」への参加は、今のところ、限定的なかたちにとどまっている。町の年中行事と芸能という従来の伝統を継承しつつ、どのように地域内外の「他者」を包含した「おわらのコミュニティ」を構築して新たな伝統を再編していくかという問題もまた、「おわら」と「おわら」を支える八尾旧町の住民が、直面している課題であろう。

文献

越中八尾尾観光協会編、2003、『越中八尾おわら風の盆公式ガイドブック』

尾堂綾子、「“おわら”が創る新たな人間関係」、『地域社会の文化人類学的調査 18 富山県八尾町の祭と観光—伝統と現在を生きる人々』、富山大学人文学部文化人類学研究室, pp.116-126

北日本新聞社北日本新聞社編集局編、1988、『越中おわら社会学 』

北日本新聞社編、2004、『越中八尾おわら風の盆』

続八尾町史編纂委員会、1973、『続八尾町史』

中部開発センター、2005、「伝統芸能をまちづくりに生かしてー大観光資源に転化させたカリスマ」、『機関誌「Crec 中部開発センター」 』、p.152

東京大学大学院工学系研究科都市デザイン研究室、2005、「西町のまちのすがた」

富山県民謡おわら保存会、2000、『越中おわら』

富山県八尾町、2003、『統計やつお』

長尾洋子、1994、「「風の盆」を通してみた八尾町の地域と住民の関わり」、『お茶の水地理』35、 pp.76-88

橋本和也、1999、『観光人類学の戦略ー文化の売り方・売られ方ー』、世界思想社

ホブズボウム、エリック・レンジャー、テレンス、1992、『創られた伝統』、
紀伊國屋書店
安田莉奈、2009、「“おわら風の盆”の観光化－組織、住民、観光客の 3 者の関係」、
『地域社会の文化人類学的調査 18 富山県八尾町の祭と観光—伝統と現在を生きる
人々』、富山大学人文学部文化人類学研究室, pp.136-150
八尾総合行政センター建設課、2000、『やつおの住まい』
八尾総合行政センター建設課、2007、『八尾地区まち並み修景等整備事業補助制度～
歴史的な風情あるまち並みを目指して～』
八尾町史編纂委員会、1967、『八尾町史』
八尾町商工会、1980、『八尾町商工観光名鑑』
渡辺佳央里、2008、「観光化にともなう祭礼の変容—富山県八尾町おわら風の盆の事例
から」、平成 19 年度富山大学人文学部卒業論文